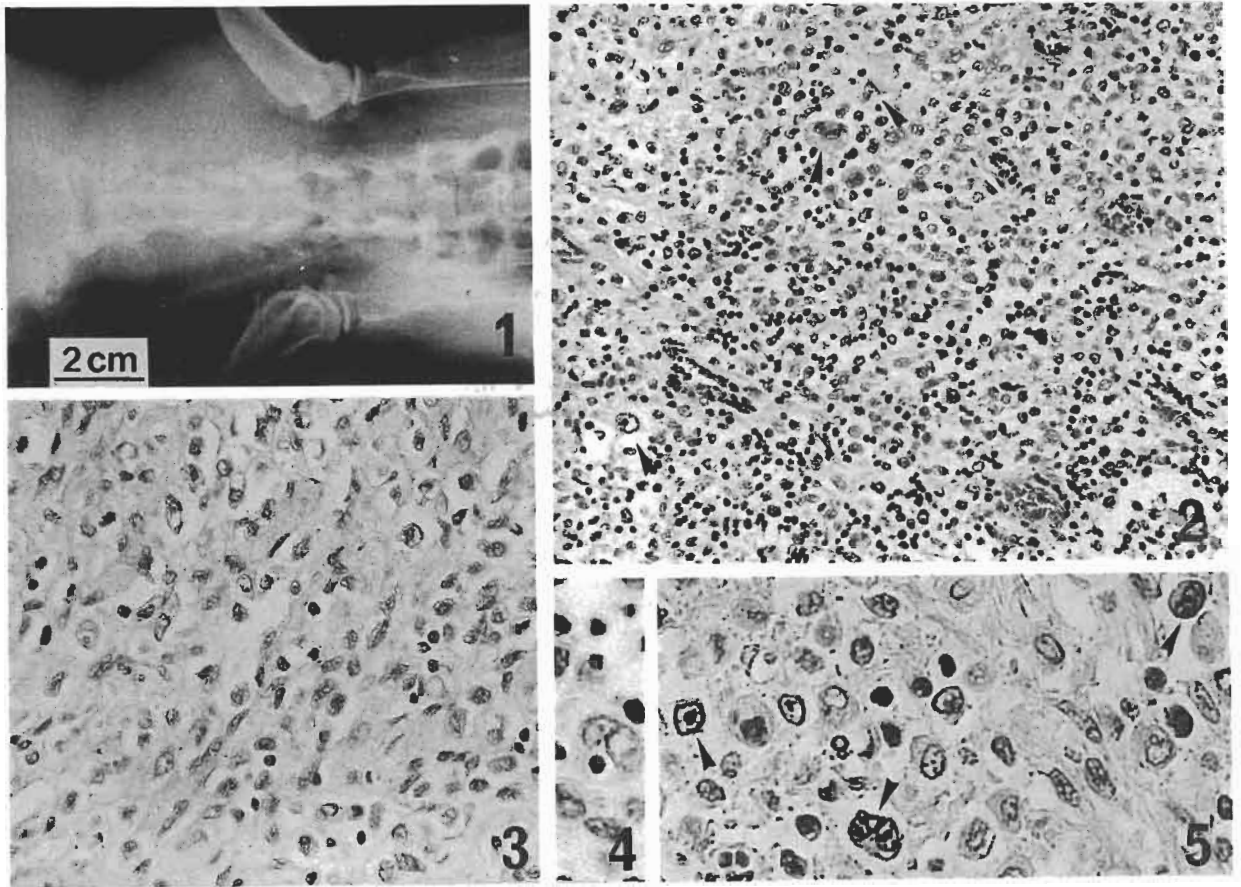


猫の皮下腫瘍

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第34回獣医病理学研修会提出標本No.611



動物：日本猫，雌，11歳，体重3.2kg。

臨床事項：X線検査により，左側顎下角直下から盲端近くにわたる頸部皮下の腫瘍による気管の右側への彎曲が観察された（写真1）。針生検により，本腫瘍は非上皮系悪性腫瘍が疑われたため，抗癌剤による治療が開始され，腫瘍の退縮後，外科摘出された。その後化学療法を受け，治療を中止したが，手術摘出後の1年間，再発・転移はない。

肉眼所見：腫瘍部の皮膚は立稜状に隆起し，皮膚表面構造はよく保たれていた。腫瘍は皮下に位置し，鶏卵大で，周囲組織との境界は比較的明瞭であったが，一部は筋層へ浸潤していた。摘出後の腫瘍の色調は表面・断面ともに黄褐色で，弾力ある硬度を有し，断面には白色不規則な壊死斑が多数認められた。

組織学的所見：腫瘍組織には，しばしば泡沫状，または空胞状を示し，比較的細胞質の豊富な小型から大型の分化した，または異型を示す（写真2，矢頭，H E，×250）組織球の増殖と，毛細血管の豊富な水腫状で疎な間質に，多数の好中球の他，リンパ球，プラズマ細胞及び好酸球の浸潤が認められた。また

散在性の線維芽細胞増殖巣（写真3，H E，×370）や抗腫瘍剤によると思われる広範な凝固壊死巣が認められたが，炎症反応を伴う腫瘍細胞増殖巣には壊死性変化はなかった。さらに本腫瘍は筋肉深部にまで浸潤していた。腫瘍細胞はしばしば貪食像を示し（写真4，H E，×500），P A S反応，非特異的エステラーゼ染色，リゾチーム及び脂肪染色陽性を示した。しばしば大型核仁と核異型を示す単核，多核または分葉核を有する巨細胞がみられ，なかにはHodgkin様細胞～Reed-Sternberg様巨細胞（写真5，矢頭，H E，×450）も認められ，部位によっては有糸分裂像が目立った。なお抗酸菌やグラム染色で有意な細菌は認められなかった。

考察及び診断：本例は組織学的には，①多形性の目立たない，多数の泡沫状組織球の増殖と，壊死を伴わない炎症細胞浸潤が著明で，②線維芽細胞の増殖があり，猫の頸部皮下に発した炎症型悪性線維性組織球腫MFHと診断した。ヒトの炎症型MFHでは一般に線維芽細胞の花むしろ模様の増殖があるが，本例のように，それが目立たない症例の報告もある。